大宮荘跡地における埋蔵文化財調査現地説明会資料
2022（令和４）年２月20日（日）

平安京跡左京七条一坊十二町の発掘調査

所 在 地：京都市下京区西酢屋町16 番
調査期間：2022（令和４）年１月11日～３月31日（予定）
調査主体：龍谷大学（大宮荘跡地における埋蔵文化財調査委員会）
調査担当：國下多美樹・木許　守（龍谷大学文学部教授）
調査支援：（株）文化財サービス（主担：辰巳陽一）
調査面積：405㎡

１　はじめに

今回の発掘調査は、校舎建築に伴う事前調査として実施しています。標高約26mの扇状地に位置します。調査前までは大宮荘と呼ばれた大学職員宿舎がありました。

平安京跡の条坊復元では、東市外町の西側、櫛笥小路と北小路に面する左京七条一坊十二町北東部に推定されます（図１）。十二町は、今回が初めての本格的な調査となりました。

調査地に近い過去の調査地として、平安高校（現龍谷大学附属平安高校・中学校）体育館建設に伴う十一町南東部の調査があります（図２調査11地点）。その時の調査では平安時代前期の西三・四行界の柵、井戸、柱穴、中世の井戸・土坑、江戸時代後半～明治初期の耕作土層、近世の井戸・柱穴・土坑が確認されています。また、東方の東市外町に含まれる十三・十四町内での平安高校の校舎建設に伴う一連の調査（同図12～16地点）でも、平安時代前期、後期の井戸、室町時代～近世の井戸などほぼ同じ時代の遺構が確認されており、平安時代前期・後期、中世、近世の三時代の遺構・遺物の検出が予測されました。

今回の調査は、敷地のほぼ中央部に東西27m、南北15mの東西向きの調査区を設定し行いました。地表土である約0.6mの現代～近代層を掘り下げたところ、ほぼ全域が砂と小石層となり、平安時代から中世の遺構が確認されました。現在、調査途上ですが、主な成果を紹介します。

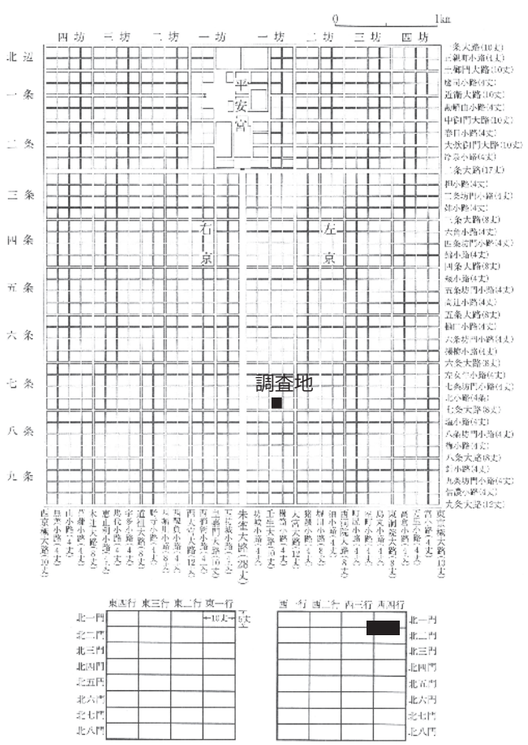


図１　平安京条坊図と宅地内の位置
（『平安京提要』引用・加筆）

図２　調査地周辺の成果（『龍谷大学2018』引用・加筆）

２　発見された遺構と遺物

１）近代から現代（図３）

漆喰製の大形の野井戸、畑の畝溝等が発見され、耕作地であったとわかりました。

２）平安時代～中世（図４・５）

平安時代前期の井戸１基、平安時代末から鎌倉時代の井戸７基、中世の土坑15基、柱穴４基、溝２条、整地跡が確認されました。

〔井戸〕　調査区の中央部に分布します。すべて一辺0.8～0.9mの方形の縦板組み井戸で、井戸１・２のみ下段に径0.55mの円形曲物を水溜めとして据えています。現状で明らかになった井戸の深さは、井戸１が1.6m、井戸４・６が1.2～1.3m、井戸２・３が0.8mであり、当時の地下水の深度や貯水量によって変えられたと推測されます。縦板に使用された板材はほとんど腐食して残っていませんが、いくつかの井戸で板痕跡を確認しています。

井戸の構築は、まず径２mほどの大穴を掘り（掘り方）、底面に井戸側を据えながら当時の地表面を覆っていた灰色粘土を充填しています。さらに水汲み時にぬかるまないように砂や小石を混じえた土で叩きしめられていました。井戸内はほとんど遺物の出土がありませんでしたが、全体を埋め戻した土から、平安時代末から鎌倉時代の瓦器（埦・鍋・釜）、土師器皿、焼締陶器甕、須恵器鉢、輸入陶磁器が出土しています。井戸の構築年代は検討を要しますが、この時代頃の井戸と推測されます。

調査区南東隅で平安時代前期の井戸８を確認しました。一辺1.1mの隅柱横板組井戸で、深さは0.7mです。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しています。

〔土坑（どこう）〕　井戸の分布しない調査地の東部と西部で確認されました。方形のものと不整形なものがあります。方形の土坑14・15は一辺1.7mないし3.0m、深さ0.05mと浅いものです。元々は深い地下倉庫ではなかったかと推測しています。一方、不整形な土坑は、遺物がほとんどないこと、凹凸の断面形状などから土取り跡と推測しました。鎌倉時代の瓦器、土師器、陶磁器が出土しました。

〔柱穴・ピット〕　柱穴１～４、ピット（小穴）１～10がありますが、建物として復元できるものはありません。井戸や地下倉庫の近くに分布するので、これに関連する施設と推測されます。

〔整地〕　中世の整地跡１～３があります。基盤のシルトや小石混じりの土を埋めて地盤改良した痕跡です。

3　調査の成果と課題

古い時代から調査の成果と課題をまとめます。

1）平安時代は、前期の井戸と遺物を確認したにとどまり、居住者や生活を復元できる資料はほとんど発見されませんでした。後世に削平されたか、空間地であったと推測されます。

2）平安時代末から鎌倉時代は、多数の井戸、土坑などを確認しました。井戸は、近接した場所で、ほぼ同じ規模、構造のものが継続して構築されていました。しかし、発掘区内で人々が居住する建物跡がまったく発見されず、遺物も少量で生活痕跡がほとんどありませんでした。京都の中世町家では、道路に面する側に建物を配置し、裏庭に井戸を設けることが一般的です。今回の調査結果は、建物がなく井戸を中心においた農地であったか、建物が後世に削られて残らなかった、のいずれかと考えられます。今後、さらに検討を要しますが、周辺の過去の調査成果と合わせて、農地として利用された可能性が高いとみています。農地とすれば、北側や東側の過去の調査でも今回と類似した土地利用でしたから一定の広がりがあったことになります。中世京都の南部、七条大路に面する一帯は、東大宮大路以東の東市の跡地に市屋金光寺、市姫神社が置かれ、一遍の踊り念仏の舞台になったと伝えられます。堀川以東は七条町、以南は八条院町という職人町として発展しました。一方、東大宮大路西側の調査地一帯は、まったく異なる土地利用であったことになります。調査地の南約１kmにある東寺は、中世に「巷所（こうしょ）」と呼ばれる道路を耕作地にしたり、寄進を受け、買得た大小の農地をいわゆる「八条以南、九条以北、堀川以西、朱雀以東」にもち、寺の経営財源に充てていたことが知られています。あるいは今次対象地もその一画に含まれていたのかもしれません。今後、出土遺物の内容も含めて具体的な土地利用の確定を進めたいと思います。

調査は、残された期間で平安時代以前の土地利用の解明が課題になります。砂や小石の分布は河川の堆積を受けた場所であったことを示しますが、いつ流れた川であるのか、水田跡は無いかなどの点を解明しなければなりません。

おわりに

今回の発掘調査では、周辺住民の皆様に多大なご協力をいただいています。厚く御礼申し上げます。なお、この調査には龍谷大学文学部文化遺産学専攻の学部生、文学研究科の院生が考古学を学ぶ場として活躍してくれていることを付言しておきたいと思います。

関連調査文献

龍谷大学2018：龍谷大学『平安京跡左京七条二坊五町 (東市跡) 発掘調査報告書』2018年
調査11：平安学園考古学クラブ編「平安京東市周辺の調査一左京七条一坊十一町―」『平安学園教育研究会研究論集』44、平安学園教育研究会、2003年
調査12：前田義明「18 左京七条一坊」(京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 56年度 京都市埋蔵文化財調査概要 (発掘調査編)』1983年)
調査13：平安学園考古学クラブ編『平安京東市外町の調査一平安京左京七条一坊十三町一』平安学園平安中・高等学校、1986年
調査14：平安学園平安京跡遺跡調査委員会「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『研究論集』第 41号 、平安学園教育研究会、1998年
調査15：平安京調査会、1976年 未報告
図１　：古代學協会『平安京要提』1994年

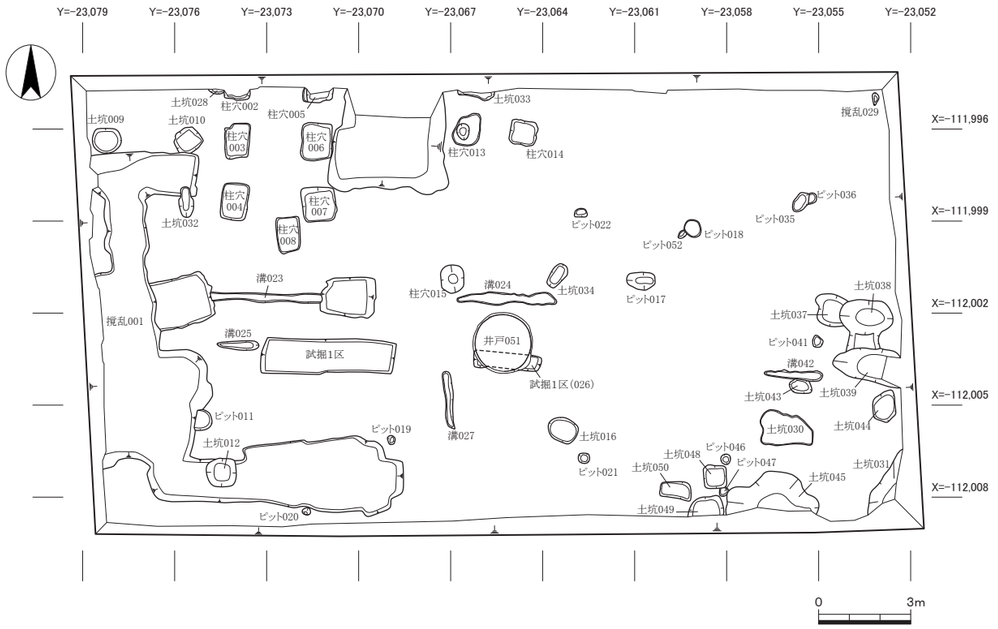


図３　第１－１面（１層遺構：近現代）平面図（１：200）

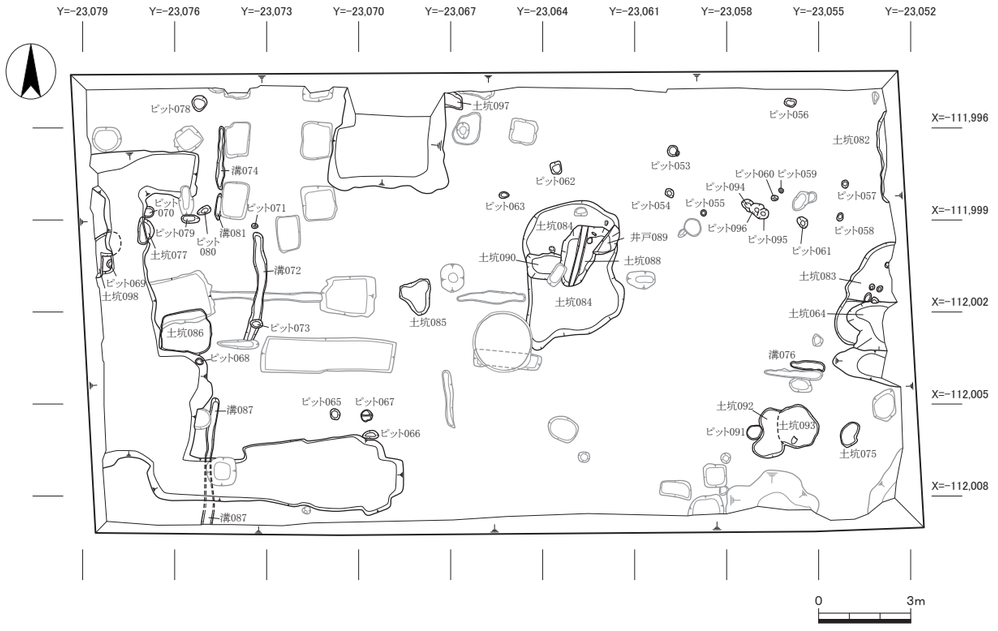
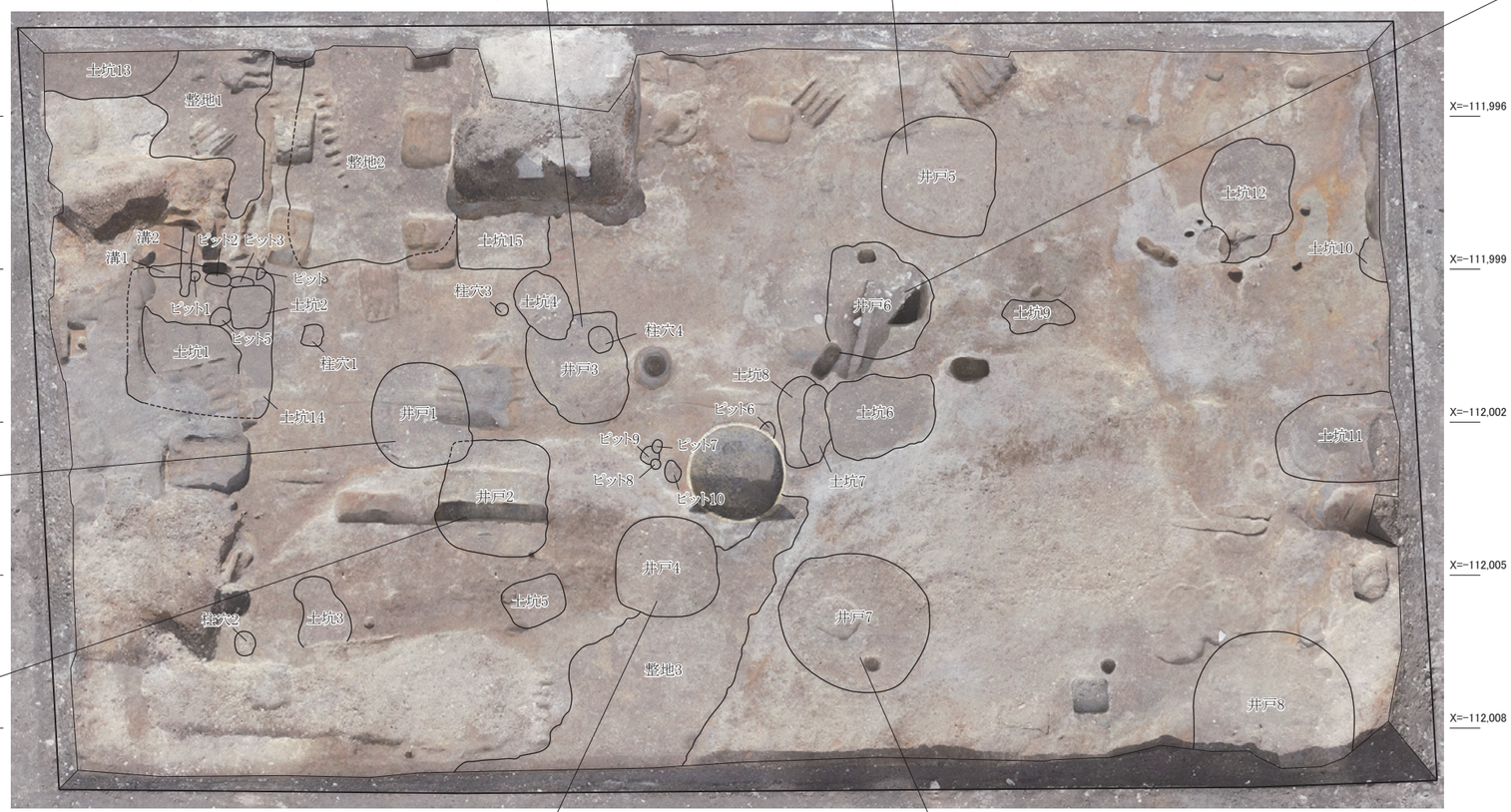


図４　第１－２面（２a・２b層遺構：中世）平面図（１：200）

井戸3

井戸5

井戸6



井戸1

井戸2

井戸4

井戸7

図５　第１－３面（2c層遺構：平安～中世）平面図（１：120）